

【意見交換】

寺院調査資料から地域文化振興を考える

—— 深浦円覚寺古典籍聖教の県重宝指定によせて ——

《特別講師》（講演登壇順）

渡辺 麻里子先生（大正大学文学部教授・前弘前大学人文社会科学部教授）

三村 三千代先生（八戸学院大学短期大学部客員教授）

阿部 泰郎先生（名古屋大学名誉教授・龍谷大学文学部教授）

《司会進行》 弘前大学人文社会科学部准教授 原 克昭

【原】 特別講師の先生方、ご講演まことにありがとうございます。

まずは、講師の先生方それぞれ相互にご感想・ご意見あるいはご質問を交換いただき、ご視聴の方々よりお寄せいただいたご質問も踏まえながら、寺院調査資料から考える地域文化振興につきまして、よりよい未来像を皆さんと一緒に描ければ一つの成果ではないかと思っております。それでは、ご講演いただいた順で講師の先生方にご感想・ご意見あるいはご質問等をいただければと思います。渡辺先生からお願いします。

【渡辺】 まずは、三村先生、それから、阿部先生、貴重なお話をありがとうございます。大変勉強になりました。

まず三村先生のお話についてですが、玄人・素人、それから、もう一つに「関心のない人」という層があるということをお示しいただいて、なるほどと思いました。そのお話をうかがい、意を強くしましたのが、裾野を広げていきながら山を高くしていく、という考え方が、全く「市民調査団」について考えるところそのものでした。その考え方を別の角度からスバットと書いていただいで、大変ありがたく思いました。文献資料調査は、専門家集団だけで行うより、町民・市民の皆様と一緒に

ていきながら、広く御理解を得ることが重要だと考えています。われこそはと思つてご参加くださる方、少しでもご興味がある方には、是非、駆けつけていただけたいと思います。

三村先生と少しだけ違う言い方をするならば、皆さんには、実際に調査に参加するというような行動までしなくとも、ファンでいていただけたら十分にありがたいことです。例えば、今日のようなこうしたフォーラムを開催する折には、聞いてくださるような、少しでも関心を持っていただき、知ろうとするお気持ちのある方がいてくださることが、大変ありがたいことなのです。皆様も、日々お忙しいこともあり、実際に調査に行くことは難しい方もおありだと思いますが、見守って下さっているということだけでも私どものようなプロジェクトにとって、また文化資源の継承にとつて、非常に大きいことだと思っております。

それから、知らなければただの紙というお話も、全くそのとおりだと思います。現在、様々に受け継がれてきた資料も、家の世代が変わる際に、お蔵にある和本たちが処分される傾向にあります。お蔵の中を整理するときに、壺とかお軸のような物を、いきなり捨てようという方はあまりおられないのですが、紙の束に関しては、あまり綺麗な状態ではないなと思われると、すぐに処分してしまい、お蔵がさっぱりしたことを歓迎するケースが少なからずあるようになっております。

テレビに「お宝鑑定団」のような番組がございます。値段を付けてその高い安いを楽しんでおりますが、紙に文字を書いた物、歴史資料というようなものは、驚くような値段がつくことはめったにありません。しかし、値段が付かないから価値がないのかといえば、全くそういうことではありません。値段には現れない価値があること、書いてある内容を知ろうとすることや、それらの本や文書が、今ここにあることの意味を、皆で共有していくことの大事さを、次の世代にも伝えていくことが大事なことはないかと思ひ、お話をうかがっております。

また、阿部先生のお話は、これまでいろいろなところでうかがう機会も多くございましたが、本日改めて、津軽と只見のお話を有機的にまとめていただき、大きな動態の中でどのように位置づけていくのか、明確に示していただきました。私は自分自身の発表の中で、「ネットワーク」という表現を使っておりましたが、これはもともと阿部先生がよく使われていた用語を、受け売りで使っていたものでした。それを今、阿部先生から今日のような考え方で、大きな動態として、日本中の様々な動態をお示しいただきました。今日の私たちは、中央と地方の人や資料の関係、また、資料が地方にあることの意味などについて、様々に学ばせていただくことができたいと思います。どうもありがとうございました。

【原】ありがとうございます。では続きまして、三村先生より感想・ご意見あるいはご質問等いただけますでしょうか。よろしく願います。

【三村】まず、渡辺先生のお話は、今まで報告書で拝見してきたことを改めて確認できたこともあって、ああ、なるほどと思うて伺いました。渡辺先生の語り口調が素人の方もその気にさせるような語り口調であるのが素晴らしいなと思うて伺いました。その上で思ったことは、素人がそういう作業なり何なりに参加したいと思ったときに、窓口が分からないということがあると思うので、例えば、深浦円覚寺の調査に、今はコロナで難しいとしても、それが再開されたら参加したいと思うような方はどこに聞いたらいいんでしょうか。それが一つ伺いたいたいところでした。

あと、阿部先生のお話は、奥会津の調査について、今、聞いただけでは理解できないところもたくさんあるのですが、交通の要所にそういうものが集まるというお話は、すごく納得して聞くことができました。そしてまた、そのお話の中で、円覚寺に残されている文書が醍醐寺のものよりも古いものがあるんだというようなことも伺って、本当に円覚寺に

は宝物が隠されているんだということを改めて感じることもできました。阿部先生が今、立ち上げようとなさっているアーカイブスネットワーク、これは専門の方のものになるとは思いますが、そういうところにも素人が関わろうとしたら、どういった関わり方ができるのか、そういうところをそれぞれ渡辺先生、阿部先生にお伺いしたいと思ったのですが、いいでしょうか。

【原】ありがとうございます。ひきつづき、阿部先生から三村先生のご質問を受けつつ、ご感想・ご意見あるいはご質問等いただければと思います。

【阿部】ありがとうございます。僕も、渡辺さんと三村さんそれぞれのお話からいろいろ刺激をいただきながら、最後の話を務めましたので、その中に感想を織り込んでもいる感じだったのですけれども、改めて申しあげますと、実は渡辺さんの取り組みは以前から注目しておりました。今も中央と地方を自在に往還する非常に大きなスケールで活動中で、深浦という土地、その皆さんとの出会いを通して、お寺の聖教の価値を青森、弘前という地域に即してみんなで共同して明らかにすることに取り組んでおられます。三村さんがご指摘なさった素人と言われる方々、いわゆる市民を巻き込んで、地域共同で行われることが最も注目されます。三村さんの先のご質問ともつながるのですが、えてして我々専門家という人種は、研究者として、いくら各分野のスペシャリストが集まっても、それはそれぞれの分野で自分たちがおもしろいと思、価値があるとするものを列挙して、お互いの間ではもちろん非常に盛り上がったたり、新しい発見に興奮して次のプロジェクトにつながっていったりするわけですが、しかし、残念ながら、それが本当に社会全体に開かれて共有されるものになっていかない。これは今、特定の分野だけではなく、人文学全体にたいして不要論が唱えられるくらいにしろにさ

れている、孤立し疎外された状態をもたらしている原因のすくなくとも一部を成すでしょう。これは文学研究に限らず、多くの分野が現在直面している課題だと思いますが、それを突破するためには、社会との、そして市民とのつながりを回復する、ということがぜひ必要だと思っています。そのためには、各地域、中央だけではなくて地域、地方からはじめて、たとえばこの深浦の聖教典籍などの価値を新たに発見して、文化遺産として社会全体が認めるように、その取り組みとともに発信していくことが必要だと思っています。それをただ専門家が独占的に担うのではなくて、その地域の皆さんと一緒に取り組む過程からこうした発信までを行っていく。それを実現するためには、我々はいろんな意味で根本的に発想を変えないといけない、取り組み方を新たにしていかなければならないと思います。

こういうプロジェクトをどういうふうに進めていくのかということ、私もまだ成案はないのですが、深浦プロジェクトの取り組みは、まさに我々の一つのモデルとなり、すぐれたケースワークのひとつとして各方面に刺激を与えることは間違いなくと確信しています。多くはクラウドファンディングのような形で社会からお金を集め、できた成果をアウトプットとしてお金を出してくれた人に還元するというケースはよくあるのですが、そういうやり方ではなくて、みんなが当事者となって、直接資料そのものに関わって遺産化のプロセスを一緒に経験こそが生きて後につながるものだと思います。実は私、これから一週間後は奥会津只見町で地域の方々に成果を報告する、久野さん、小池さんたちと一緒に取り組んでいる、同じく地域の文化遺産をその社会と共にする機会です。この講演によって青森でいわば前触れをさせていただいたわけですが、そのための一つの重要なアイデアを、私は深浦からいただけた、津軽という地域からいただけたと思っております。

【原】ありがとうございます。先の三村先生のご質問も踏まえて、視

聴者の方からいただいたご質問にもあります「市民参加型の資料調査についての可能性」について、渡辺先生よりご意見を伺いたいと思います。

【渡辺】一般の方が参加をなさりたいという場合についてですが、この方法に関して、現在のところはまだ手探り状態にあります。少しづつ方法が確立しつつあったところでコロナ感染拡大となり、調査自体ができなくなってしまうため、改めて模索することになるかと思えます。文献資料調査の場合、やはり相手が御寺宝ですので、調査団を統括する立場からしますと、調査を進めていく上での事故は絶対に避けなければなりません。この場合の事故というのは、本や資料に何か起きるということを指します。文献資料調査においては、人間よりも資料の方が大事なのでして、その本や資料に何か起きたら、調査そのものが大失敗であるわけです。このような事故を起こさせないために、細心の注意を払います。

まずは参加する方の範囲についてです。深浦円覚寺の市民調査団について、これまで実施したところでは、深浦町民の募集に関しては深浦町役場に窓口になっていただきました。広報は、深浦の広報誌を使って深浦町民に呼びかけました。高校生の場合は、高校の先生に格別にご協力いただきました。当初は、引率の先生にも来ていただき、時には教頭先生にまでご参加いただくなど、生徒さんだけの参加にはしないという状態で進めておりました。弘前大学に関しては、担当教員の授業の範囲や知っている範囲で呼びかけたところ、責任を持てる範囲ということで、まずは進めた経緯がございます。

ですので、これ以外の範囲について、本当に広く呼びかけるところかという点について、果たしてできるのかというところまでは、まだ進んでいなかったというのが正直なところだと思いますが、今日ご参加下さっている皆様の中で、もしご希望があるということがあれば相談しながら進めることになるかと思えます。

なおこの調査においては、初めてご参加下さる場合は、いきなり本を触るといったことはないようにしております。必ず現場で、古籍籍の取り扱い方という講習会を実施してから、実際に触っていただくことになっております。いきなり、何これ？とペタペタ資料に触るといったようなことは、一切していただいております。

こういう点では、本当に開いた市民調査団を作っていくところまでのノウハウはまだないというところだと思います。逆に、今までは、広く呼びかけをさせていただいても、なかなか新たな参加者が現れないということがありますので、今後参加へのリクエストがございましたら、随時それに応じていくような形で進めさせていただければありがたいと存じます。

今まで、「いきなり調査してみませんか」というのではなく、まずは講座のほうに来てみませんかということ、それから調査に入っていただいておりますので、調査の経験がなくて不安だという方も、安心してご参加いただけたらと思います。

先ほどのチャットのご質問にもからむかもしれませんが、実は、本を触るのに慣れていない方に触っていただくという点に関しては、本当のことを申しますと、少し勇気が要ることなのです。大抵の場合は、所蔵者の方がそれを絶対に嫌がりません。場合によっては、例えば大学生でも学部生はお断りしますとか、素人に触って欲しくないと考えるご所蔵者が多いことは確かです。深浦円覚寺様の場合は、調査の意義や講習を踏まえる手続きなどについて御理解をいただけて進めることができました。こうした円覚寺様のような寛大なご判断は、異例なことなのです。ご所蔵者のご理解のもとで、例えば地元の高校生には文化財を使って学ぶ教育の意味ということをごむしろお考え下さり、賛同していただいているということもございます。

ですので、文献資料調査、特に寺院資料調査に関しては、一般の方と

一緒に行く調査を実施している例は、ほぼありません。市民参加について、お檀家さんがそれに協力して下さるということで参加者を募り一緒に行っているケースは他県の事例でございますが、広く一般に募る例は他には見られません。深浦の市民参加型の文献資料調査は全国に先駆けたと例と言えます。こういう状況が、今のところの現状かなと思っております。

私がこうした市民参加型という形を思いついたのは、色々な理由がありました。まずは人手の問題です。京都の大寺院の調査では、全国各地から専門家だけでも人が多く集まるのですが、青森・津軽で調査を行おうとしても、弘前大学には文献資料調査ができる専門家の数が限られています。ですから弘前では、地域の特性もあって、玄人だけで大規模な調査団を作ることがなかなかできません。また一方で、弘前大学は考古学が盛んな大学ですので、考古学の先生方の調査、つまり多くの市民や学生と一緒に調査をなさっている姿を見て、初めて私は、国文学系の文献資料調査がいかに閉鎖的であるかということに気付かされました。

国文学の場合は、事情もある訳ですが、大学院生や博士課程に行った学生の中で、特別に許可が出た人でないと参加できない調査も数多くあります。あるいは、大学の教員でも断られる調査が山のように存在しているのです。その一方で多くの人数をかけないと調査は進まない、終わらないという現実的な問題もあります。こうした現状に直面した時に、さきほど阿部先生がおっしゃったように、私たちは次の世代の育成を考えていかなければなりませんし、資料の未来への継承を考えなければならぬ中で、玄人だけでやれる量は限られていますので、そこを何とかしていきたいところなのです。

先ほど三村先生のお話でいうと、私は自分のことを「玄人」と言うのは少し恥ずかしいと思うところがあります。私はまだまだ素人で、修行中の身です。とはいえ経験を積んでそれなりに調査ができるようになり

ました。その私が、一番最初はどうかと言えば、どこかに連れて行っていただいて、そちらの先生に、「あ、それ、だめです。そういう触り方じゃだめ」など、時にお叱りを受けながら、「えっ、そうなんですか、申し訳ありません」と、一つ一つ学んだところがございます。最初は誰でもできない訳ですが、次第に慣れていき、資料が扱えるようになってくるのです。調査に参加して、様々に資料に触れているうちに、古典籍に対しての、あるいは古文書に対しての理解者Ⅱファンが増えていく、それが大事なことなのではないかと思っています。

申し訳ありません。長くなってしまいました。

【原】 ありがとうございます。一般の方々も含めた共同調査の今まさに現在進行形にある、そしてさらにこれから未来進行形に向かっていく、その途上の一環として深浦円覚寺もあり、阿部先生のお話にありました奥会津只見もあるという状況でしょうか。また、阿部先生からは「4Rサイクル」の提唱もいただいたかと思えますけれども、そちらの補足も含めて、共同調査の現況あるいは聖教調査の今後あるべき将来像について、阿部先生からビジョンをご提示いただけるとありがたいのですが、いかがでしょうか。

【阿部】 まさにそのビジョンを今、これから積極的に提案していこうと思つてるところです。そして、それが人文学の未来に、あるいは、様々な地域社会の未来につながっていく、文化創生のための共同のプロジェクトとしてつくっていくかなければならない、と考えます。これは様々な機関や人と協力しながら進めていく必要がありますが、その提案の一つが、それを実際に担うためのプラットフォームが必要であろう。そのプラットフォームは中央集権的に一つに集中させるのではなくて、複数のいろいろな個性ある特色をもった機関が互いに協力し合い、補い合つて取り組んでいく、そういう分散・連携型プラットフォームとしてあるべきだと考えており、その一つをまずは龍谷大学、あるいは名古屋

大学など、そういう機運のあるところできつくりと活動しております。大変ありがたいことに、今、我々がみんな関わっている国文学研究資料館が、国立歴史民俗博物館と並んで人間文化研究機構という人文学の横断的な大きな機構ですけれども、そのなかの国文研が、津軽では「デジタル風土記」という大変印象的なデジタルアーカイヴの取り組みを地域丸ごとを対象として行われています。この大型プロジェクトがさらに発展して、後継プロジェクトがデジタルによる課題解決型の人文学をつくっていくという計画が発進しそうですね。これは、人文学全体にとつて一つの大きなチャンスだと思えます。これは国文研だけで実現できるものではなくて、むしろいろんなポジションと地域との協働で取り組んで、はじめて全体で推進することができます。その推進のため様々に連携できるプラットフォームを日本中につくって、それぞれ特色を生かし、それぞれの中でできる取り組み、あるいは地域社会との、あるいは、それぞれの課題をもつ皆さんがいろんな形で当事者になる、そういった諸条件を資源として、それを全部、多様なものをそのままで生かせるような仕組みをつくっていく。そのための一つの思想というか、単なる方法論ではなくて、むしろ思想と言つていいと思うのですが、実践的な仕組みが提唱されなければいけないだろうということで、その試みを「4Rサイクル」という形で、一方通行じゃなくて必ず帰っていく、戻っていく、みんなが共有する。この、全てが共有する文化のイメージは、和歌の座とか連歌の座のような、中世にも近世でも俳諧やいろんな形で存在した、貴族も民衆も隔てなく楽しんだ、そういう座の文化といったものをイメージしています。みんなで一つの聖教なら聖教を囲んで、いろんなものを種にして歌を詠んでいくんですね。楽しんで宴をする。そういう座をあちこちで遺産をめぐってつくればいいなと夢想しているわけです。

【原】 ありがとうございます。玄人そして素人さんを含めた市民の

連携、プラス各地域の機関どうしの連携、そうした複合体から新たな実践的な考え方を、これから皆さんとともに模索していけることが望ましいと思っております。

そのあたりも含めまして、今度は青森にフィードバックした場合、視聴者の方からの質問にも「青森県に古文書が多数残されている理由」とありましたけれども、青森の個性や特殊性、特に青森が典籍・古文書の豊かな地域となった背景や地盤・基盤、もしくは逆に津軽地域が都や近代朝鮮も含めたネットワークの起点にもなっていたこと、そのあたりのお考え、あるいは質問にもありますが、歴史的に見た安部氏、安東氏あたりの関わりがあるのかどうかを含めまして、三村先生のお考えから伺えるとありがたいです。

【三村】 それこそ私には専門外かなというところではありますけれども、いろんな可能性はあると思います。だからこそ、これからの調査、あるいは作業が楽しみだなという感じはいたします。青森県における時代ごとのネットワーク、これは、ものすごく大変なテーマですけれども、すごくおもしろいと思います。

【原】 ありがとうございます。全国各地域でも調査に出かけていらっしゃると思います阿部先生、渡辺先生の方から、他の調査との対比でも構いませんし、青森の特殊性のようなものをあぶり出していただけるとありがたいと思います。いかがでしょうか。

【渡辺】 在地というか、土地に根差した形の調査というのは、私は青森、津軽でしか行っておりませんので、ほかの地域との差というものがあるのかなのか。明確にお答えすることができません。しかしこれはどちらとも言えるのだと思っています。

まず一つは、日本全国、気付いていないだけで、ありとあらゆるところに文献資料が存在しています。まず、日本人は何でも書きます。それから、書いたものをとっても大事にします。場合によっては、紙が貴重で

あることから、反故紙として、ふすまの裏打ちになってしまったり、ろうそくの芯になってしまったりとか、そうした再利用の仕方をされてしまうこともあるのですが、本当によく書く国民であり、文字の大事さ、書き留めた情報の大事さというのをよく理解していて、絶対に捨てないという姿勢が長い間続いていたと思います。

しかし今、こういう長い間の伝統的な文化が切れてしまっていて、紙に書かれた物についての敬意が失われてしまっているように思います。くずし字というのは、例えば、どの世代でしょうか、祖父母の世代ぐらいいだと、草書体を皆が普通に書いていて、年賀状など、宛名を書く場合でも、草書体がよく使われていましたので、郵便局にも必ずくずし字を説む人がいました。こうしてくずし字を使うのがポピュラーだった時代から、現在は、あのくずした文字が読めなくなっています。しかしこうしてくずし字が読めない時代というのは、日本の長い歴史の中では本当にこの数十年の出来事なのです。文字が読めなくなってしまうたら、大切に保存されてきた和古書や文書は、ただの紙、もつと言うと、ただの汚い紙になってしまい、汚いから捨てようという処分の対象になっていきます。これは先人が必死でとにかく後世のために残したいと思いついて、とにかくこれをよそに渡すとか、秘密にしないとか、これは我が家の貴重な情報だということで、一生懸命に伝えてきたものです。それがポンポン捨てられてしまわないようにすることが、そして未来に継承していくということ、現代人の課題であり、先人から託された私たちの務めなのかなと思います。

青森に関しては、青森の皆さんの気質、よく「じよっぱり」と言われますが、私からしますと「じよっぱり」は誇り高い素晴らしい気質ですね。時に「ツガリアン」などと敬意を表して呼ばせていただいたりしていました。この気質は、例えば、歴史的に見ても、うかがえます。関ヶ原ではとりあえず両方についておく。秀吉に領土を安堵してもらいな

ら、徳川の世になったら家康の養女の満天姫と結婚するとか、両方につくのは幕末もそうでした。明治の世になった時には、これからの時代は外国語が重要だと考え、素早く藩士を留学させたりなど、先を見据えて行動する気質もうかがえます。こうした歴史の積み重ねにより、弘前の藩校の旧蔵資料は、他県のように、県立図書館やその地域の国立大学に行かないで、東奥義塾高校に伝わりました。

こうした青森の独特の歴史というのは、やはり誇るべきものだと思います。青森は都からは距離があるのだけれども、絶対に置いていかれない、もっと言うと、時代の先へ行くぞと考えて行動していた青森の先人たちの気質が、一方で、様々な資料を今に残してくれているのではないかと私は考えています。この話は、明確な根拠があつて言っていることではございませんが、私が深浦円覚寺や藩校資料、その他、様々な津軽の寺社を調査しながら感じていたことになります。

【阿部】 私はその点では教えていただくばかりです。教えられながら、ますます津軽、青森がおもしろくなっています。実は大学時代、一度だけ八戸にイタコの口寄せの調査にくっついて行って、そこから本場の恐山まではどうも行けませんでした。八戸で終わってしまったという懐かしい思い出があります。それ以来、久しぶりに今度は津軽に出会うことになりました。この津軽という地域が、太宰治に代表されるように、非常に特有の自意識といますかアイデンティティーを持っている、それがどういふところから歴史的に由来するのかということと、新たに発見された古文獻、宗教文獻などどうつながりがあるのか、この辺りはとても興味がありますが、私にはまだ見当がつかないところです。

ただ、今回の深浦円覚寺のものについては、かなり特殊な条件があつたであろうと思います。これは先ほどから申し上げた北前船、日本海交易の海上交通のネットワークがもたらす経済的な富、それが同時に信仰と結びついて、観音の霊場でもある、この複合的な非常に特殊な条件。

さかのぼると、もっと北のほう、十三湊という中世の日本の航路の一番北端にあつて、蝦夷地に渡る要にもなっていた場所で、遺跡もたくさん残り、歴史・考古から様々なアプローチがなされているところですが、中世にはこういったところにさかのぼって豊かな宗教文化も存在したはずですが、渡辺先生に案内されているいろいろな教えられたばかりなんです、それと深浦とが果たして同質なものでつながるかどうかという点からない。

もう一つ特別な条件は、江戸幕末から明治維新を経て、大きな変革の中で修験道が完全につぶされました。先ほどの根拠が破滅したように、全く根こそぎにされた宗教集団とその文化を、その後で多くの人たちが尽力して再興しました。その大立者の一人が義観さんであるわけで、この働きが極めて大きかったんだらうということは無視できない。この場合、それこそ昔から歴史的に修験者の全国的なネットワークと、極めて独自のその文化が前提としてあるわけで、醍醐寺もそういう修験の伝統、ネットワークに根ざして、成り立っている。それが現在につながって国宝指定に至る大きな蓄積と運動を伝えたところでありますので、この点を加えて考えてみたい。

それから、私に関わったローカルな地域の宗教文獻を中心にした文化遺産の伝存という点をあげますと、愛知県の奥三河という地方は、名古屋と全く反対に過疎の山間地域ですが、天竜川流域の山中に「花祭」という民俗芸能が伝わります。この「花祭」は民俗学的にも芸能史の上で注目される非常に有名なもので、東北でも法印神楽とかいろんな形であちこちに残っている神楽と比較できる、その座標となつています。「花祭」は、どこから伝わってきたのかまだ分からず、いろんな説があるんですが、現在「花祭」を伝える太夫たちの家には中世にさかのぼる宗教文獻が山のようにあつて、何世代にもわたって近代まで写し継がれ受け継がれている。それを私どもは「花祭アーカイヴス」として取

り組んでおり、その記録を、まだすべてではないですが、かなりの部分を押さえて記録化して、地元に残し、保存することを通じて継承に役立てる、そういう仕事を続けてきたところです。これは文化庁の助成や愛知県との連携など、いろいろなアプローチにより名古屋大学で続けられるのですけれども、何よりももちろん地域と連携して共同で取り組む、もう一つの地域連携のケースであるわけです。この花祭の写本群の残り方を見ていると、先ほど渡辺先生が言われたように、とても大事にしている。そして、それが層をなしてちゃんと受け継がれて、伝わっている。手垢にはまみれていますが、虫も食っていないですね。逆に、大きな寺院で大切に保存され、大切にされ過ぎて封印されると、かえって虫に食われてしまう。そうしてボロボロになった例を私は幾つもお寺で見ているのですが、在地ですと伝えられているものは、そういう例が逆にはないですね。これは驚くべき現象で、こういう現象をもっともつとこれから全国で発見して、その遺産のそのものの価値はもろろんですが、それがどう伝わってきたのか、その知恵や経験の共有、それが横につながっていくと、先ほど言いましたけれども、むしろ地方から大きなインパクトを日本の社会に、そして未来の人文学に与えられるきっかけになっていくのではないのでしょうか。

そういう意味でも、実はこうした宗教文化遺産のアーカイヴスネットワークをつくりたいという希望を私は抱いております。当面は同じ東北同士で、北東北の津軽深浦と南東北の奥会津只見が、一緒に共通テーマを掲げてサミットでも開いたらどうかと考えています。それを起爆剤として全国に広げていったらどうかという夢を提案したいのですが、いかがでしょうか。

【原】ありがとうございます。非常に話題が広がっておもしろく興味深くなったところですけれども、時間のほうも差し迫っております。今の阿部先生からいただいたご意見も踏まえて、かつての中央と地方

たいな図式ではなくて、地方と地方のネットワークで全国を描き出す、再構築する、その一つのジャンルとして文献資料学、文献調査があり、さらには民俗学などと学域横断しながら、さらに築いていけるというこゝとめざしつつ、私たち玄人も素人も手を取り合って、今後とも進めていければいいなと思った次第です。本当に惜しい限りですが、時間となりました。

【渡辺】申し訳ありません。原先生が綺麗にまとめてくださったところで、もう少しだけ、皆様に御礼の言葉だけ、言わせていただければと思います。

調査をしながら、青森の皆さんの気質や特徴に関係するのかどうかは分からないですが、深浦円覚寺の調査というのは、実に短期間で大量の調査を進めました。この速度で進めることは、並大抵のことではありません。

調査を実施する時には、受け入れる側の体制も、調査においては大変なものです。深浦円覚寺調査の場合、深浦町役場の方も、一般参加の町民の方々も、本当に根気よくお付き合いくださり、ご協力くださったことに、心より御礼申し上げます。調査の意義というものを、少しお話しただけで御理解くださり、調査への協力を厭わない。そういう意味では、実は深浦町民の方は「玄人」だと言えるでしょう。

私も弘前大学チームの方が、背中を押されるというか、引っ張っていただくというか、一生懸命やらないととても申し訳ないように思えるほどに、深浦の皆様の熱意と愛情と優しさとして根気と、こういうものに動かされて調査をさせていただいていくところがあります。深浦町民の方に調査に加わっていただいて、寸法と丁数の確認は、予定していた時間の三分の一ほどで終わってしまいました。各回、調査に熱心に来ていただき、こちらがそんなに根を詰めると疲れるのではないかと心配するほどに、皆様の方が「あと少し」「ここまでではやりたい」

など一生懸命に作業をして下さいました。また調査の回数を重ねた方々は、資料撮影など、より高度な調査内容にも携わっていただきました。

また弘前大のチームにつきましても、多くの学生が意欲を持って参加してくれました。先生方も、大変お忙しい中、本当に様々な業務がある中で、それらをかき分けて深浦に何度もお運びいただいた、この調査はそうした皆さんの思いの集大成だったと思います。

つまりこの「市民調査型の調査隊」は、皆さんの力でもって、皆さんが「玄人」になって成し遂げたものではないかと思えます。皆様にごのお礼を申し上げたく、改めて御礼を申し上げます。

【阿部】 只見の『神皇正統記』も今、福島県の文化財になりました。このオールカラーの報告書も手に入りますので、よかったら欲しい人は只見町の教育委員会に注文してください。

【三村】 すみません、一言、私もいいですか。

【原】 お願いします。

【三村】 ほかの地域もそうでしょうけれども、青森には奥深いものがある、先ほど民俗的なものというお話もあつたんですが、紙に書かれていないところの口伝えとかそういうもので傳承されて、それがどんどん消えていってしまうという部分もあると思います。民俗学的な調査というのは、また別な形にはなるんでしょうけれども、そういうところもぜひ進めたいものだなということを今、改めて思いました。青森県、奥深いです。皆様、よろしくお願いいたします。

【渡辺】 文献資料の調査については、まだまだやるべきことがたくさんあります。総力戦で臨まないといけない量があるのです。皆さまどうぞご協力くださいますようお願いいたします。

【原】 ありがとうございます。それでは、本フォーラムにおける意見交換の場はこれにて閉めさせていただきます。講師の先生方、まことにありがとうございます。

— 了 —
(文責・原 克昭)